ニュージーランドの武道家の礼法意識
―剣道（居合道・薙刀）を中心に―

アレクサンダー・ベネット

1. はじめに

世界中の多くの国々と同様，ニュージーランドでも日本の武道を信奉する人が近年かなり増えている。この背景には次の二つの社会的動向がある。

(a) スポーツ界や宗教界における伝統的価値からの脱却

(b) ニュージーランドへのアジア系移民の増加

(a)に関して私が考えるのは，多くの人々が伝統的な組織化された宗教から明らかに離れ，精神的充足を得るための代替手段を求めているという事である。「神秘的」なアジアの文化と規範が肉体的精神的幸福感への全体論的アプローチであると認識され，人々の関心を高めていることは事実である。そして，ニュージーランドのいわゆる主流スポーツの低迷が起こり，近年の若者は武道の様な新しい運動を選択するようになってきている。また，社会に暴力沙汰が増えている事が，多くの人々が武道を始めるきっかけになっているともいわれる。この観点からすれば，ニュージーランドで断然人気のある武道は空手道，柔道，とテコンドーといえよう。

しかし，本稿はニュージーランドの剣道界における「礼」（礼儀作法及び敬意）と「規律」の認識について概略する。ニュージーランドでは居合道やなぎなたを修行している人も少数存在する。これらの人々の殆どが同時に剣道を学んでいるので，私の剣道事情の考察は上記２つの武道も考慮に入れる。

2. ニュージーランドではどのような人達が剣道をやっているか？

空手道や柔道に比較すると剣道は決して実戦的でない。では，ニュージーランド人が剣道を始める主なきっかけは何でしょうか？今のところ，剣道人口は 500 人程度しかいないため，競技志向は高くない。参加できる試合の数も少なく，全体的なレベルもまだ低いので，単なる競技スポーツとしてやっている人はほとんど存在しない。概して言えば，ニュージーランドで剣道をやっている人は大きく分けて次の３グループであり，その動機もそれぞれのグループで相異が見られる。

一．現地ニュージーランド人（約 50%）

二．移民（30%）

三．短期滞在のアジア人（20%）

最初に一番小さいグループ三から見てみると，短期滞在のアジア人は主に日本，韓国，中国の企業社員や留学生である。中国からの留学生はニュージーランドに来て初めて剣道を学ぶ人も多く，一方このグループの多数派である日本人と韓国人は，年齢は 20 歳代から 40 歳代で剣道歴も長く，殆どが二段から五段の有段者が多いであろう。自国では一時期剣道を止め，ニュージーランドに来て再び剣道に出会い，懐かしさや友人を作る意味からまたやってみようと思った人達が多いと考えられる。

二番目のグループも殆どが韓国人，日本人，少数の中国人から成る。移民の人達よりもむしろその子供達が地域の剣道クラブに入り，親はクラブの活動で受動的な役割を担うという傾向が見られる。親は，日本または韓国（またはアジア）の伝統文化との結びつきを維持したい，そして子供達に，ニュージーラン

ドでの通常の教育課程にはないアジア流の伝統的な規律と礼儀作法を身につけさせたい，という願いから剣道場に通わせる。1970 年代から 1980 年代の剣道ブームにおける日本の親達が抱いていた思いを彷彿させるものがある。

現在，剣道人口のうち最も大きなグループはニュージーランド生まれ育ちの人達である。剣道を始めた動機はいくつかあり，大まかに下記の三つに分かれる。

a．　10 代・20 代の若者で日本のポップ・カルチャーであるアニメや侍映画，または「武士道」など伝統的な側面に高い関心を持つ人。

b．　日本に滞在した経験があり，その間に程度の差はあれ剣道に接する機会があった人。

c．　主に中年の男性で，剣道以外の武道をやった経験がある。が，試合に重点を置く事に満足せず，より「精神的」な性質を持つ何かを求めている人。

上記の動機は重複する場合と例外もあるが，全グループに共通していえるのは，試合に関する関心が比較的薄いという事である。ある程度試合に興味があっても，出場する機会が少なく，逆に試合のためや自衛手段のために剣道を始めた人は，どうしても長続きしない。これは，ニュージーランドで行われる他の武道と違うところである。人それぞれであるが，一般的に剣道が自己成長や克己のための手段である事を早くから認識した人，またはそのようにとらえ始めた人だけが継続できる。

3.　依然として存在する日本の影響力

韓国移民者の剣道人口（韓国人経営の道場において）が急激に増えているにも拘わらず，ニュージーランドの剣道は，形式や作法において相変わらず日本の「礼」の規範に影響を受けている。これはニュージーランド剣道連盟が「日本の礼法に準拠する方針」があるからである。確かに，ニュージーランドの剣道家にとって，「礼儀作法」を重視する点は魅力の一つだといえる。道場に出入りする際，意識的に礼をする。正面に，先生や先輩に，稽古仲間に対して深く丁寧に礼をする。不器用ながらも，入念に蹲踞をする。

日本とニュージーランド両方の国に住んだ経験から明言できることであるが，外観上，礼儀作法は日本よりも熱心に，忠実に守られようとしているといっても過言ではない。それは，剣道の儀礼形式の全てがニュージーランド人にとって全く未知のものだからであり，日本でよく見られるような，省略などはしない。皮肉にも，ニュージーランドの多くの剣道家は，道場に入る時に深く礼をしないのは，剣道に対する冒涜行為と考えている。剣道の基本的所作の中では重要事項であり，日本からの高段の指導者や現地指導者が「正しい礼法」を常に強調して指導する。

剣道の「異国的」なものに熱心になるニュージーランド人は，特に日本の先生から言われた事は守るよう最大限の努力をする。しかしながら，道場の中で帽子をかぶるなどについて，注意された事がないため，無意識に日本の礼儀作法の「違反行為」をやってしまうこともたびたびある。また，剣道の蹲踞は何のために行うのか，数種類の礼法を使い分ける意味，また「右起左座」の理由を理解している人はさほどいないが，ともかくそれが稽古仲間や，道場環境，ひいては稽古に使う道具に対する敬意を表していると，単純に理解し，それを守って満足している。つまり，敬意を表す「神聖な儀式」であると考えられ，そのため「正しく行わなければならない」という強い意識がある。

たとえ，袴にしても，5 本のひだが，それぞれ儒教の五常の徳を表すものだと知っていれば，正しくたたまなければならないという意識が働く。竹刀の手入れにしても安全のためだけではなく，それが「刀を象徴している」として行う。相手に礼をするのも「敬意を表す礼が無ければ，棒で叩き合う行為は暴力でしかない」という理解や，稽古前と後に「please」,「thank you」の代わりに日本語で「お願いします」,「あ

りがとうございました」というようなことは，すべて儀式・儀礼である。このような儀式を正しく行うことによって，何かの意味を見出している。

形式やその状況によって，日本的にいえば間違い・ズレは起こることは確かだが，できるだけ「日本剣道の正しい礼儀作法」を遵守する事は，ニュージーランドの小さな剣道界にとって非常に重要視されている。一般的にニュージーランド人は，「礼儀正しく」心がけることは，全ての社会で美徳とされる「敬意」を表しているという認識のもとに，その儀礼そのものに「心の平穏」を見出し，それを行う事に満足する。ニュージーランドの剣道場は本当に日本から移築されたような環境に近いものであるが，実際，所定の礼儀作法は少々頑なと思えるほど，日本より厳しく遵守され，通常の稽古中も維持されている。

4. 木刀による稽古－不安と信頼を通して生まれた「礼」への理解

しかしながら，形としての礼儀作法を遵守する事が，真の礼や敬意を理解する事になるのであろうか？また，敬意の気持ちさえあれば，それを表す外見的な形式は関係あるのであろうか？この疑問は，昨今の国際剣道界では特に重要だと思う。例えば，韓国が蹲踞のような「伝統的日本の礼儀作法」は，自国の文化には関係無いとして省略しているからである。要するに，いくら日本の伝統文化だと強調しても「礼儀を教えるなら，自国の作法に従ったほうがよいのではないか」という考え方が出てきている。

「礼」の「作法」は，敬意と真摯な気持ちを表すためのフレームワークを与えてくれるという点では欠かせないものである。しかし，日本においても「礼」という概念は，形式的もしくは気持ち的に粗末に行われることをたびたび目にする。例えば，なぎなたの稽古でいつも驚かされるのは，二人の選手が正しい形式に従って丁寧に礼をした後に，もう一度「ありがとう」といいながら非形式的な礼を笑顔で交わす。ならば，最初の礼は何の目的だったのかと思ってしまう。これは儀礼のための儀礼なのか？このようなシチュエーションを数え切れないほど見てきた。

過去四年間，私はニュージーランド・他国の学生に対して一つの実験を行ってきた。高価な道具が不足している事から，剣道の授業は木刀のみで行い，全日本剣道連盟が作成した九本の技から成る「木刀による剣道基本技稽古法」を指導している。十回から十五回の授業の中で，この稽古法と私が名付けた「ソフト剣道」(スポーツチャンバラに類似する)を織交ぜて行う。剣道の中で重要な概念である「気剣体一致」,「残心」,「攻め」等をあまり細部まで踏み込まずに簡単に説明する。一番最初の授業では正しい礼儀作法を教え，道場の安全を保つためのポイントとなる礼の精神の重要性について話をする。

一連の授業の最後に学生に感想文をまったく自由に書いてもらう。多くの学生が「礼儀作法」と「敬意」の重要性について，私からの催促がなくても自らが述べる。大抵の者が，木刀を使って稽古相手に対して寸止めの打突をするのは初めてだったし，体のすぐ上で打突を受けるには，当然大きな不安があった。間違えて相手を打ってしまわないか，また相手が自分を打たないかという「ミス」を恐れる。

興味深いのは，この「神経をすり減らす」過程の中で学生が「信頼の絆」と共に「注意と配慮」（思いやり）の気持ちを自ら養っていった。最初の礼の儀式は立会いの始まりをしるし，そして高い集中力・注意・信頼が必要である事を示唆していると。最後の礼は無事に一つの作業が終わり，互いに「協力ありがとう」という気持を意味している。これは，多くの学生が記述している概要である。礼の重要性をいちいち強調しなくても，学生は武器を使用した練習の危険性に気付いて自らがそれを学んだのである。防具を付けて竹刀で練習した場合，この危険性はそれほど強く感じられないようで，木刀稽古の緊張感・興奮とそれに伴う相手に対する「相互敬意」に基づく関係・やり取りが「たまらない」といわれる。

5. 結び

剣道の指導者は，剣道は「礼に始まり礼に終わる」と強調し，正しい礼儀作法の由来を知らずに教えている事がよくある。歴史的文献が証明しているように，今日の剣道における礼儀作法の多くは二〇世紀になってから形成され，必ずしも古い「伝統的」なものではない。「礼」（お辞儀）をするという単純な動作は，日本では日常的な人間関係で習慣化しているので，道場における「武道的礼」の本当の意味が時として見過ごされることがある。一方，ニュージーランドでは剣道の礼儀作法は決して習慣ではない。そのためか剣道クラブの会員は礼法にできるだけ忠実に従おうとする。彼らは，少々「異国的」な形であれ，礼は敬意を意味するという概念について大体納得している。

私の経験からすると，ニュージーランドの場合，木刀を使用して危険を感じる場面を稽古に取り入れた時，礼に対する理解がより鮮明に認識されたと思う。結論として，ニュージーランド剣道界における「礼」に対する一般的な認識とは，精神が剣道の修練と一体化している。そして，可能な限り作法を正しく実行する行為が，その時の礼の重要性に集中する・思い出させるフレームワーク及び入口を与えてくると信じている。